
ぬらりひよんのひ孫

チャクラ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ぬらりひよんのひ孫

【Nコード】

N8800Y

【作者名】

チャクラ

【あらすじ】

奴良リクオが鶴をたおしてから数年後。リクオは自分の息子に四代目を継がせようと考えていた。その息子の名は――奴良璃陰……。

はじめに

初めましての方もそうでない方もこんにちは。チャクラと申します。この小説は奴良リクオの息子であり、奴良組の四代目である奴良璃陰らりあんが主人公の小説です。

注意：この作品が僕の書く最初の小説ですので、あまり完成度を期待しないでください（笑）。また、ほとんどの原作キャラが登場しません……。更には皆さんが思っているイメージとはだいぶ違うと思いますので、氷麗つひらファンの方は読まない方がよいと思います。すごいショック受けると思いますので……。こんな僕ですが読んでいただける方の期待に応えられるようにがんばります。ちなみに、更新は遅めです（笑）。

登場キャラ紹介(前書き)

主人公設定です。

登場キャラ紹介

奴良璃陰 ぬらりおん

リクオとカナの息子。

原因は不明だが、血の半分は妖怪で、もう半分は人間。リクオと違って、自分の意志で妖怪になれる。

最初は奴良組の総大将に対して全く興味が無かったが、後に四代目を継いで、弱い妖怪たちを守ろうと考えるようになる。

〈人間サイド〉

容姿は人間時のリクオが眼鏡を外し、髪を黒く染め上げた感じ。

一人称は「俺」。

基本的に優しく、礼儀正しい。

ヘタレな一面がある。

〈妖怪サイド〉

容姿は一代目ぬらりひょんと瓜二つ。

一人称は「俺」。

とにかく自由で、水のようにつかみどころがない。また、大胆で強気。

登場キャラ紹介（後書き）

次は第一話です。

奴良組、四代目（前書き）

いよいよ第一話です！

奴良組、四代目

「河童。きゅうりだぞ」

「ありがとうございます。璃陰様」

とある日の朝の浮世絵町と呼ばれる東京都内にある町。奴良璃陰と呼ばれる少年は、その町の妖怪屋敷と呼ばれるもおおかしくなくらいぼろい屋敷に住んでいた。

璃陰は家の庭にある池に住んでいる河童に冷えたきゅうりを二本渡した後、同じ庭にあるしだれ桜に目を向けた。サラサラと音をたてながら枝をユラユラと揺らしている。

「…今日も綺麗だな…」

「そう思うのならそろそろ四代目を継いだら？」

「狂骨…。なんでそうなるの？」

突然、両手で髑髏を抱えている黒くて長いウェーブヘアの着物姿の少女から声をかけられた。

「そうですねよ、若！」

「璃陰様は我ら奴良組の総大将となるべきお方なのです！」

「鴉天狗！？鈴彦姫まで！？」

今度は鴉の姿をした小さな天狗と、黒くて無造作な短い髪に二つの丸い鈴を頂いている着物姿の少女が声をあげた。

「中学校などいかに四代目を継いでください!」

「無茶言つなよ、鴉天狗!俺は継がないっていつてるだろ!」

「そんなんだから若い妖怪じゅうまどもに舐められて、シマを荒らされるんでしょーが!」

「なんで俺のせいになるの、狂骨!」

「……なにやってんだ、璃陰」

妖怪たちともめていると、今度は大人の男性が話しかけてきた。白い羽織を羽織っており、白い髪は後ろに長く伸びている。

「リク才様!」

「総大将!」

鴉天狗達が声をあげた。

「父さんが放任主義だから、代わりに俺が怒られてんの」

璃陰がため息まじりに言葉を発する。

「当たり前だろ。お前が早く四代目を継がなければ……俺死ぬな……」

「父さんはまだ30代でしょーが！」

30代にしてはおちゃめすぎる頼みに璃陰は怒鳴りつけた。

リクオと呼ばれる男性こそが璃陰の家に妖怪たちが住む理由なのだ。

リクオは奴良組と呼ばれる妖怪の集団——百鬼夜行の総大将で、ぬらりひよんと呼ばれる妖怪の血を四分の一を引き継いでいるクォーター——つまり、ぬらりひよんの孫だ。ちなみに、なぜそんな中途半端な者が総大将なのかは、璃陰には知らされていない。

ようするに璃陰は、ぬらりひよんのひ孫なのだ。

璃陰はズンズンと家の中へと戻っていく。が、鴉天狗が彼の前にたちだかった。

「待つてください、璃陰様！何故そこまで四代目を継ぐことを嫌がるのですか！？奴良組は現在壊滅寸前の状態なのですぞ！！」

「……だからだよ」

璃陰は静かに呟く。

「どっち道この組はつぶれるんだよ!!」

奴良組、四代目（後書き）

なんか中途半端な終わり方ですね・・・。

まさかの狂骨登場です。

感想お待ちしております。

それではまた次回！

絡新婦へじょろづぐも (前書き)

たぶんショック受けると思います。

絡新婦へじよるづぐも

「ちょ、ちょっと待ってください璃陰様！」

ズンズンと部屋へと歩いていく璃陰を、鴉天狗が引き留めようとした。

「よくお考えください！何度も申し上げますが、奴良組は数年前に御隠居様や何人かの幹部が殺され現在では壊滅状態なのです。だからこそ、璃陰様が四代目を継ぐ必要があるのですぞ！」

「……じゃあ聞くけどさ……」

璃陰がため息まじりに呟いた。

「……ただの人間である俺が四代目を継いで、なにか変わるの？」

璃陰が奴良組四代目を継がない理由は二つある。

まず一つ目は、十三年前の事件に関係している。

十三年前、たった一人の妖怪が雪女や青田坊をはじめとするリクオの幹部達や初代総大将ぬらりひよんを刀一本で切り殺したのだ。その出来事は奴良組の妖怪たちに恐怖を与え、他のシマの組には活気を与えた。

影響を与えたのは妖怪ではなかった。

璃陰も元々四代目を継がないとは考えてはなかったが、納豆小僧という妖怪がうっかり口をすべらせてしまったため、妖怪同士での争いに対する恐怖を与えてしまい、その考え方は180度ひっくり返ってしまったのだ。

二つ目の理由は、璃陰が人間だということだ。

彼を生んだ父親は四分の一が妖怪というクォーター、母親は普通の人間だ。この二人の間に生まれた璃陰には妖怪の血がほんの少ししかない。

再び璃陰は部屋へと歩いて行った。それを慌てて追いかける鴉天狗と鈴彦姫。そして、それを見ていた狂骨は……

「なんであんなのに惚れたんだろ……」

とボソツと呟いて追いかけていった。

ぼつんと庭に残ったリクオはため息まじりに呟いた。

「……あいつが四代目を継ぐのは何時になるのやら……」

そついいながら枝垂桜を寂しげに見つめていた。すると、後ろから誰かが近づいてくる気配。

「若は四代目を継ぐ気なんてありませんよ……」

「絡新婦……。何が言いたい……？」

リクオに話しかけてきたのは、口を蜘蛛で隠している、着物姿の女性だ。彼女は蟲妖怪の集まりである妖蟲会の会長である。

絡新婦はクスクスと笑いながら声高々に言い放った。

「ハッキリと言わせてもらいます……。この私に四代目の座をよこさない！」

そんな絡新婦の姿に、リクオはハアとため息をついた。

「……確かにお前の組は他のシマの妖怪からは、奴良組のなかで最強との噂だ。いままで沢山の妖怪を殺してきたからな。」

「ホホホ……。そうでしょう……？」

「……だが、魑魅魍魎の主つてのはそんなじゃねえ。」

「あら、まさか百物語組との戦いをお忘れになっているのですか？」

「……ッ！……」

この言葉を聞いた瞬間、リクオは突然黙りこくった。その姿をみた絡新婦は、口を三日月状にして微笑んだ。

「あんな生ぬるい誓いを立てたせいで、奴良組はつぶされそうになったのですよ。まあ人間にも私たちを理解してくれる者のおかげでなんとかまりましたし、それになぜか総大将の友人以外の人間たちはその事件のことを記憶から消されていましたけどね……」

リクオは黙り続けている。

「時代は変わった……。いつまでもあんな甘い誓いを立てていたらこの組はいつかつぶれる。そうならない為にもあの誓いを変えませんとね……。」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8800y/>

ぬらりひよんのひ孫

2011年12月11日17時52分発行